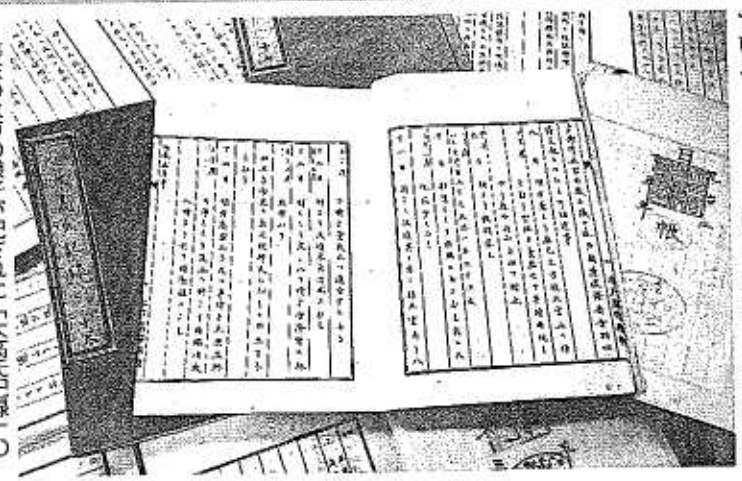
毎　日　新　聞

2008年（平成20年）12月29日（月）　13版　社会　24

幕末の夏、暑かった

水戸藩の商人日記　15年間の気温を記録

幕末の水戸藩の商人日記「大高氏記録」に1852（嘉永5）年から約15年間、寒暖計でほぼ定刻に測定した気温記録が記載されていることを茨城大の磯田道史准教授（日本近世史）が確認した。19世紀半ばに日本人が機器で観測した気象記録は珍しい。専門家は「現在のデータと比較することで長期的な気候変動が分かり、温暖化の進行を考えるうえで意義がある」と評価している。【八田浩輔、秋田浩平】



幕末の水戸の様子が記された「大高氏記録」の茨城大が所蔵する写本

8月平均　現在より0.9度も高く

毎日新聞が首都大学東京の財城真寿美・特任研究員の協力で、力氏をセ氏に直し、観測時刻のずれなどを補正して現在の水戸市の気温と比較した。それによると、15年間の1月の推定平均気温は2・3度（現在の平年値2・8度）、8月は25・9度（同25・0度）で、現在より寒暖差が大きい傾向が見て取れた。

茨城大にある日記の写本は1868（明治元）年（1866年分は欠本）までであった。原則1日1回力氏で記され「寒暖計は朝五つ時（季節により午前6時半～8時）に記し」と注意書きがあった。記録がない日もあった。

寒暖計の種類についての具体的な記述はなかった。機器を使った国内の連続的な気象観測記録は、1872年に明治政府が函館に気象観測所を開設するまで、1819年以降シーボルトら在留外国人と、江戸幕府が設置した研究機関が観測したものなど数点が確認されているだけ。磯田准教授は「米相場に反映される飢饉を把握するため、気温を知る必要があったのではないか」とみる。

公式記録なく貴重

19世紀の気象記録に詳しい三上岳彦帝京大教授（気候学）の話　公式な気象記録がない時期で極めて貴重な史料だ。幕府や在留外国人による東京、横浜の気象観測記録と今回の記録を重ねると、1850年代の関東地方は一時的に高温だった可能性が高い。現在の温暖化傾向が始まった時期を知る指標になる。

大高氏記録

水戸藩の商人、大高氏が江戸後期から明治初期に残した76冊の日記。政治・社会情勢や農産物価格などのほか気象に関する記述も多く、作家の故・吉村昭氏が歴史小説「桜田門外ノ変」の執筆で参考にしたとされる。